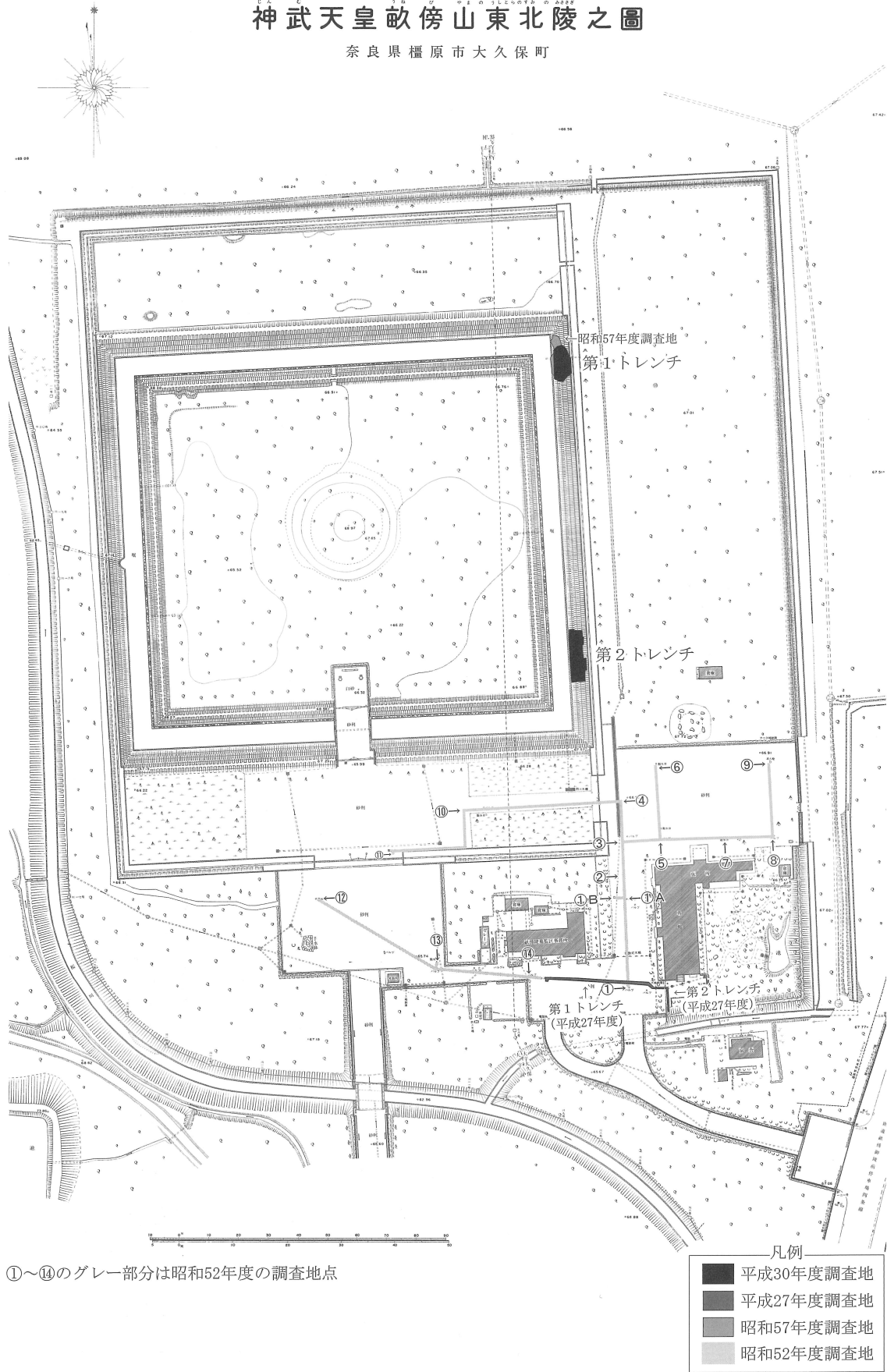


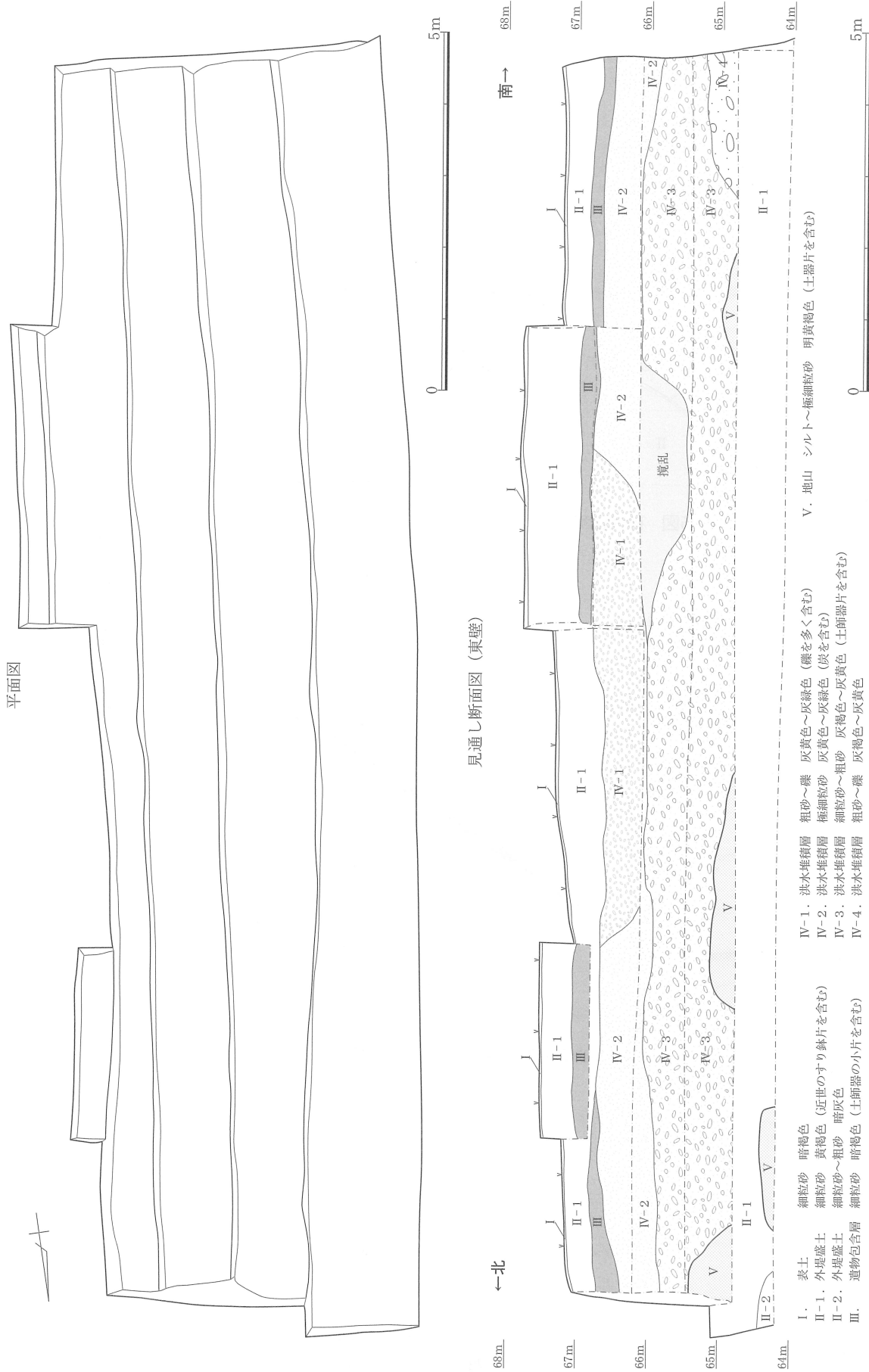


# 神武天皇畝傍山東北陵之圖

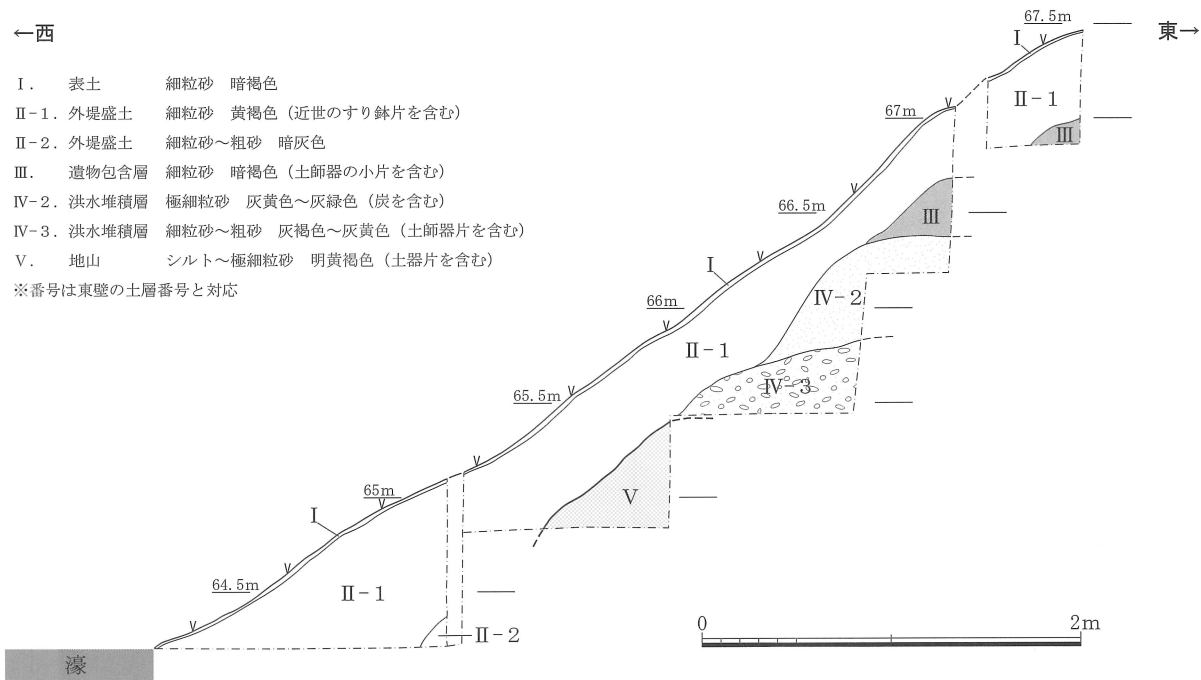
奈良県橿原市大久保町



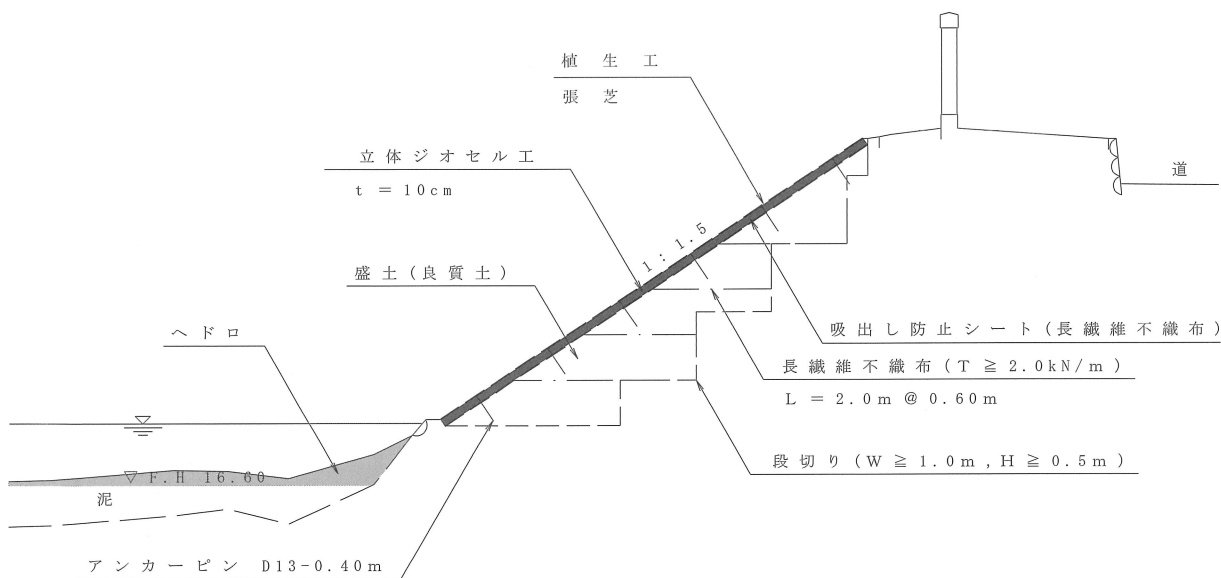
第43図 畝傍山東北陵 調査地位置図(1/2,000)



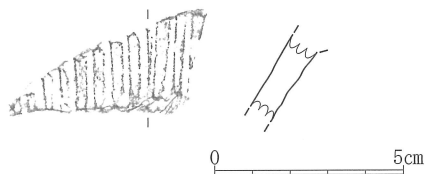
第44図 畝傍山東北陵 第2トレンチ平面図・断面図(1/80)



第45図 畝傍山東北陵 第2トレンチ北壁見通し断面図(1/40)

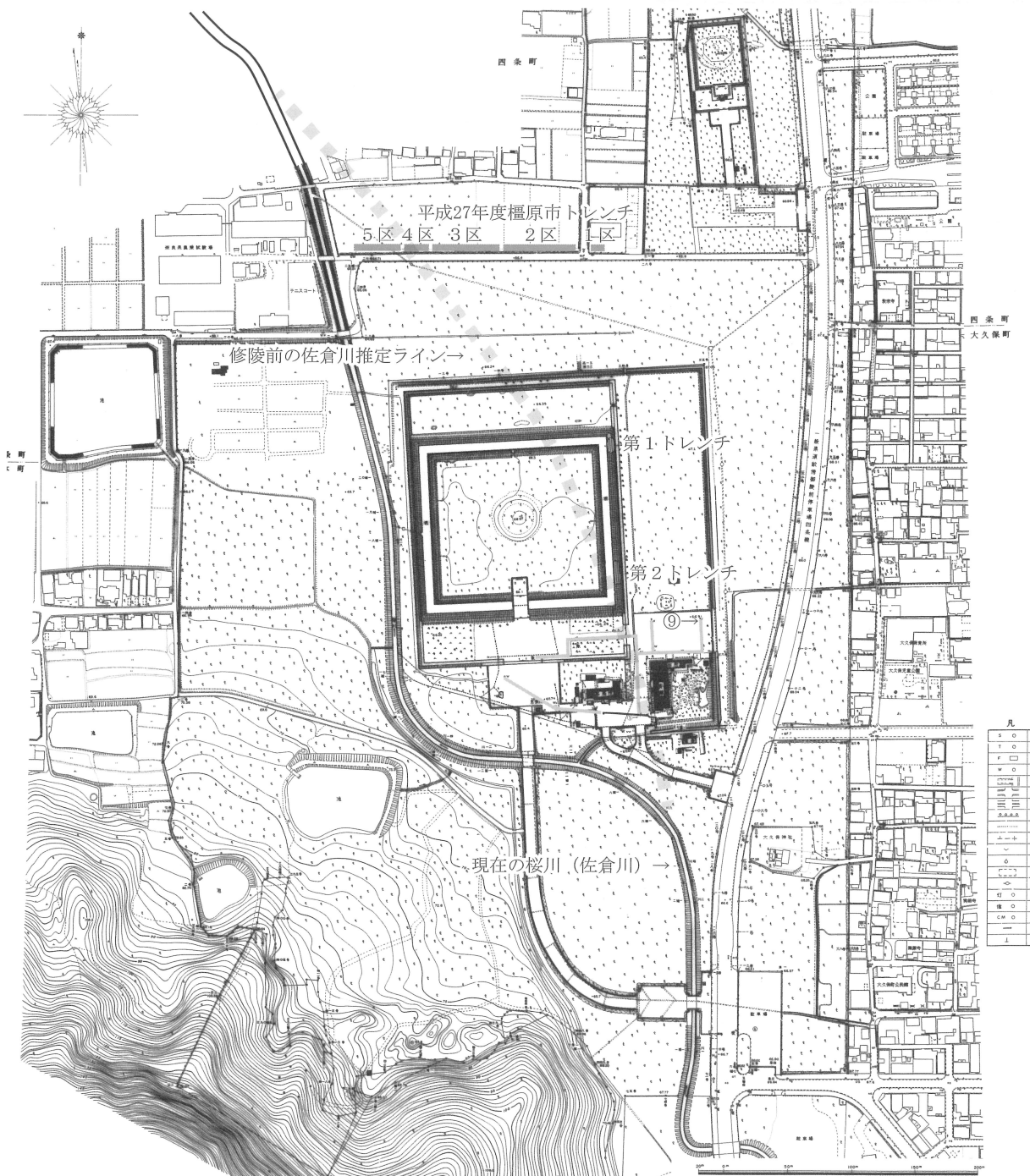


第46図 畝傍山東北陵 工事断面模式図(約 1/100)



第47図 畝傍山東北陵 出土遺物実測図(1/2)

IV層は、粗砂と礫を主体とするIV-1、極細粒砂を主体とするIV-2、細粒砂から粗砂を主体とするIV-3、粗砂から礫を主体とするIV-4に分かれる。このうちIV-4からIV-2にかけては、上層ほど主体となる砂礫の粒径が小さくなっていて、またIV層では、斜交ラミナも確認できる（図版48-1）。こうした土層堆積のあり方は、典型的な洪水によるものと考えられ、急流の時に大きな砂礫が堆積（IV-4）し、流れが緩やかになるにつれて、IV-3、IV-2と小さい砂礫が堆積するようになっている。IV-1は、IV-2より後の洪水で堆積したものである。当該地の外堤は、地山から遺物包含層までを堤状に削り出した後に、斜面を平滑にするための整地盛土をおこなったものである。



第48図 畝傍山東北陵 修陵前佐倉川流路推定位置図(1/5,000)

## 2 遺物

立会調査で出土した遺物は 18 点で、整理用コンテナ 1 箱分である。全て第 2 トレンチより出土した（図版 48-5）。内訳は、外堤盛土（Ⅱ-1）より土師器片 8 点、埴輪片 2 点、陶器片 1 点、縄文土器片 1 点、洪水堆積層（Ⅳ-3）より土師器片 4 点、縄文土器片 2 点である。遺物包含層（Ⅲ）では、断面観察の際に土師器の極小片が複数見えていたが、取り上げなかった。図化できたものは、遺物包含層より出土した近世の陶器播鉢 1 点である（第 47 図）。体部の破片で、内面には放射状の播目が残る。外堤盛土が江戸時代以降のものということを示す点で重要である。ほかの 17 点はいずれも土師器体部の小片で、器種の特定が困難なものである。

## 3 修陵前の佐倉川について

今回の立会調査では、第 2 トレンチにて洪水堆積物の層を検出した。こうした河川堆積物については、橿原市教育委員会が、当陵北方にて平成 27 年度に実施した調査時に確認している。その報告では、「4 区西半で検出した河岸の方位は南東―北西方向であり、神武天皇陵に沿う形で付け替えが行われる以前の桜川の様子を窺い知ることが出来る。」<sup>(3)</sup>としていて、修陵前の佐倉川（桜川）旧流路の方向を示唆する。そうした橿原市教育委員会による成果と今回の立会調査の成果をあわせて考えると、佐倉川旧流路は第 2 トレンチ西方を流れていた可能性がある（第 48 図）。

## まとめ

今回の立会調査は、昭和 52 年度と平成 27 年度におこなった立会調査の結果をふまえ、遺構・遺物の出土に注意した。しかし、調査の結果、遺物の出土は少量で、遺構も検出されなかったため、整備工事は予定どおり施工した（第 46 図）。立会調査の成果としては、佐倉川旧流路によるものの可能性がある洪水堆積層を検出したことである。これまで、修陵により佐倉川の付け替えがおこなわれたことは知られていたが、旧流路の具体的な位置については不明であった。旧流路の位置が推定されたことを受けて、今後周辺で調査を実施する際には、遺構・遺物だけでなく旧流路などの地形にも注意しておく必要がある。（横田真吾）

## 註

- (1) 笠野 毅「畝傍陵墓監区事務所水道管理設工事箇所の調査」『書陵部紀要』第 30 号、宮内庁書陵部、1979 年。
- (2) 横田真吾「神武天皇 畝傍山東北陵御休所修繕工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第 68 号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2017 年。
- (3) 石坂泰士「大藤原京右京五条七・八坊、慈明寺遺跡」『平成 27（2015）年度 橿原市文化財調査年報』橿原市教育委員会、2017 年。



1 調査地全景（南西から）



2 第2トレンチ全景（西から）



1 第2トレンチ東壁北側（西から）



2 第2トレンチ北壁（南から）



3 第2トレンチ工事掘削（南西から）



4 第2トレンチ壁面精査（北西から）



5 第2トレンチ出土遺物